

中国人—〈政治の言葉〉と〈歴史の言葉〉

中嶋嶺雄

中国をめぐる論議が、昨今ますますかまびすしくなっている。だが、様々な政治的主張やイデオロギー性向、そしてまた「訪中記」などが氾濫しているのに、中国についてはわからないこと、不可解なことがあまりにも多い。私自身のささやかな体験からしても、中国を考えるには、どうしても、中国人の民族的な特性や文化的伝統、価値観などを、激動する現代中国社会の諸断面に一度は重ねあわせてみなければならないように思う。日本人と中国人は「同文同種」という言葉が示すほどの身近な存在なのに、その実、両者はその価値観、歴史観、文明観などがあまりにも異質であるように思う。それだけに、われわれにとって右のような「迂回的アプローチ」がより多く必要なのだともいえよう。

日本人の伝統的な心情を一つの言葉で表現するとしたら、それは「士」ということになるのかもしれない。中国人の場合は、これ

たいするに「文」なのではないか。陽明学という中国の実践哲学にもっとも日本的に体当りし、そして「士」としての血誠^{マコト}に殉じた三島由紀夫を中国人が絶対に理解できないのは、この点で当然であろう。

「文」を民族の精神的支柱とする中国人は、「いざぎよし」とすることよりも歴史的時間に耐える息の長さを尊重する。香港で体験したことだが、香港の中国人は、九九年ないしは九九九年という契約期間でマンションの売買を実際にやっている。日本人の感覚からすれば、まったく理解できないことだが、それが普通なのである。

こうした息の長さは、当然、その歴史観に及ばざるを得ない。日本人は、おおむね、同時代史のなかに人の評価をゆだねようとする。だが、元来、中国人は、同時代史を歴史とはみないし、人の評価はそれを後世にゆだねるのがつねである。中国の正統史である『二十

四史』（歴代王朝の正統史）をとってみて、その時代の歴史家は、前代ないしは前々代の王朝の歴史を記述するのみで、同時代史にはふれない。ギリシャのヘロドトスとともに歴史の父といわれる前漢の司馬遷は、身を宮刑に辱しめながらも、類まれなる使命観によって『史記』百三十巻の大著作を完成したが、彼がつかえた波瀾万丈の帝王・武帝の治績についてはもとより、みずからの同時代的な論述については、これをほとんど避け、後漢の班固が『漢書』を撰するまで記述されることはなかった。

このような中国人の伝統的な歴史観からすれば、では、今日の中国は、どのような位相に置かれるのだろうか。「毛沢東思想」ですべてを統率するのみならず、毛沢東生存中にその功績を最大限にたたえ、党規約や「憲法草案」のなかにまで毛沢東の偉大さを明文化し、そうした潮流に批判的な同志や知識人(文

人)を根こそぎ打倒する今日の中国、『毛主席語録』がすべての生活と思考の絶対的基準になる今日の中国は、はたして中国の悠久の歴史の評価においてはどのようなものになるのだろうか。もとより性急な結論はくだせないが、このような「毛沢東中国」を象徴している準国歌『東方紅』の有名な一節をここにまず引いてみよう。

東は紅、陽は昇る

中国にあらわれ出たり毛沢東、

彼は人民に幸せをもたらす、

ああ、彼は人民の偉大な救いの星。

ここで時代は潮る。そのむかし、戦国時代の堯帝のころのことであるが、今日の『東方紅』のような讃歌が広く人口に膾炙していた。

わが丞民を立つる、

爾の極にあらざるなし、

識らず知らず、

帝の則に順う。

堯帝は、子供たちまでが帝の政治とその偉大さをこのようにたたえているのを知って、当初はやはり満足げであったが、さすがは聖天子といわれただけあって、これではあまりできすぎているといふかり、次第に心の不安がつのってきた。有名な『十八史略』による

と、そのとき、一介の田夫が次のような歌をうたっているのを聞いて、堯帝はかえって心がおさまったとさえいう。そのうたとは

日出でて作り

日入りて息う

井を鑿りて飲み

田を耕して食う

帝力我に何ぞあらんや。

「鼓腹撃壤」の故事ないしは「撃壤歌」として知られているこの詩の一編こそ、実は、中国人の、それも一般庶民大衆の心情と特性をもっともよくあらわしているといえよう。ここには、中国人の「自然と人生」、自然への適応力がすなおに表現されているばかりか、そのような自然の懷に抱かれた中国的な共同体(農村)においては政治とか帝力とかがいかに虚なるものであり、無力であることを示している。だが同時に、それは中国人大衆の強烈な権力批判、政治不信の表明にもほかならない。「帝力於我何有哉」の一句はそのことを痛烈に意味していよう。

私は、この一句こそ、中国人本来の政治の言葉であるとともに歴史の言葉でもあり、あると思う。もとより、毛沢東は、そのような中国人の伝統的体質を拒否するために革命

を志向し、強大なイデオロギー的権力を打ち立て、そして今回の文化大革命に及んで「政治第一」「政治優先」の社会をつくらうとしたのであった。しかし、この場合の毛沢東の政治の言葉は——その集約が『毛主席語録』である——中国人の歴史の言葉をつまみこむことができるものかどうか。私は今日のような「毛沢東思想」の統率が可能であることそのものが、中国人の伝統的な政治不信の逆説的な証明でありはしないかと疑う。そして、そのような政治不信のうえにこそ、あのような毛沢東体制は存在し得るのではないかとも思うが、だとすれば、毛沢東は政治の言葉でのみ語りすぎたがゆえに、歴史の言葉でそこに包括し得なかつたことに将来なるのかもしれない。

文化大革命によって確立したと思われた毛・林体制のうちから、またもや林彪が失脚してゆくのだとしたら、このような事実が中国人大衆にやがて知らされたとき、彼らは「帝力我に何ぞあらんや」とつぶやく以外に、どのような言葉をもって、これに応えることができるのだろうか。

(なかしまみねお・東京外国語大学助教授・356埼玉県入間郡福岡町上福岡公務員宿舎7) (三)